

「インクルーシブな学校運営モデル事業」カリ・マネ便り⑬

カリキュラム・マネージャー

農業クラブの生徒が中高養生徒のプレゼンに協力

この度、中高養の生徒が、クラウドファンディングの成果報告として行うプレゼンテーションを、更農の生徒に見てもらい、意見をもらう機会が設けられました。

これは、「連携校の教育資源を活用した教育活動」実施要項に基づき、中高養からの要望に応える形で実施されたもので、オンラインによる40分程度の交流となりました。

1月23日（木）放課後、更農から参加したのは、農業クラブの大会で発表経験のある3名の生徒です。クラウドファンディングに全国からの協力があること、集まった寄付金を村の環境整備に活用していることなどの説明に、頷いたりメモを取ったりして聞いていました。その後の意見交換では、読み原稿の位置やプレゼン資料の内容、声の大きさや速さなどについて感想や意見を述べていました。

中高養から参加したのは、今回の報告を任された生徒会旧執行部の3名で、意見交換では「農業クラブの発表の時は原稿を見ていなかったけど、どのように暗記しましたか。」

「感情をどのように表現していますか。」などと、更農の発表動画を視聴した時に抱いた疑問を投げかけていました。

人前での説明が初めてとなる3名の中高養の生徒にとっては、更農の生徒全員から「聞き取りやすい説明だった」との感想をもらったことが嬉しく、自信につながったようです。また、更農の生徒にとっても、これまで頑張ってきた農業クラブの活動が「他校の生徒への協力」という形で評価されることとなり、今後の励みになったとのこと。

「連携校への要望」（中高養⇒更農）

「連携校の教育資源を活用した教育活動」実施要項に基づいた中高養からの要望は5点ありました。

1つ目に上がっているのが今回の交流に関する要望です。

- ① 生徒によるプレゼンテーションの内容や手法についての意見交流、アドバイス
- ② 美術作品の展示、感想
- ③ 教科「カルチベーション」で使用している数学の基礎学習プリントの提供
- ④ 来年度のシラバスの提供
- ⑤ 農業クラブの授業（発表）の参観（生徒、教員）



（中高養）



（更農）

「オンライン共同学習」を計画

現在、更農の1年学校設定教科・科目「カルチベーション」と中高養の「体力づくり（自立活動）」との間で共同学習の計画が進められており、2月にも実施される見込みです。

オンライン共同学習は、両校の生徒が同じ目標のもとで同じ内容を学ぶことができるようにする試みで、MTは特別支援教諭（更農）、STは特別支援教育コーディネーター（中高養）が務め、ソーシャルスキルトレーニング（SST）を題材として実施します。

更農は1年A組またはB組のいずれかの学級、中高養は新たな「交流及び共同学習」の候補者として検討してきた生徒たちの中から3名が参加することになっています。

「個別の生徒を対象にした共同学習」「オンラインによる共同学習」という前例のない取組であり、今後に向け、できるだけ多くの知見を得ることを目標に準備を進めているところです。

中高養における教育課程上の位置付け

文科省が発行する「交流及び共同学習ガイド」には「交流及び共同学習は、相互の触れ合いを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があり、この二つの側面を分かちがたいものとして捉え、推進していく必要があります。」とあります。

「オンライン共同学習」は、その名の通り共同学習の側面を明確にして実施するものであり、そのためには教科等としての教育課程上の位置付けを確認しておく必要があります。

今回は、「カルチベーション」で実施しているSSTが、特別支援学校における自立活動に関わりが深いと考えられることから、中高養においては自立活動の内容を合わせて指導している「体力づくり」の時間に位置付けて授業を計画したところです。

対面で第4回「共に学ぶ会」

1月29日（水）「作業や学習が止まると、その後の継続が難しい生徒の理解と対応」をテーマに、更農を会場に第4回目となる「共に学ぶ会」が実施されました。

オンラインを基本にスタートしたこの会でしたが、お互いの話合いの様子を肌で感じることで、今後の「共に学ぶ会」の距離感も縮まるのではないかと考え、今回初めて対面で行われました。更農からは8名、中高養からは運営者も含め6名が参加しました。

テーマにかかわって、自信のなさの原因となる可能性、マズローの欲求5段階説を基にした背景などについて説明を受けた後、2グループに分かれ、該当する生徒の状況や対応の仕方などについて意見交流しました。

「ひたすら待つ」「小さな変化を受け止める」「受け止めたことが生徒に伝わったとき、信頼関係が生まれる」など、参加された先生方は、実践を背景にして交わされる言葉の重みを感じながら頷いておられました。

